

平成 26 年度 海外臨床研修報告書

「薬剤師のあるべき姿について考えた 2 週間」

研修期間：平成 27 年 2 月 21 日～3 月 8 日

研修先：アリゾナ大学薬学部

薬学部薬学科 5 年

100973413

太田 美里

今回海外研修旅行に参加したことで多くのことを学んだ。その中でも、日本とアメリカの相違点を意識しながら研修を行った。相違点と一言で言っても保険制度、医療システム、教育制度など多岐にわたる。本研修では、この相違点を学ぶことで、日本の利点、アメリカから取り入れるべき点を学ぶことを目的とした。

研修中に行ったことは主に講義、学生集会、セミナー、レジデント報告会の見学、教授からのレクチャー、臨床体験である。1週目は教授から直接、アリゾナ大学での教育制度や付帯施設についての説明を受け、アメリカにおける教育制度を学んだ。2週目は、アリゾナ大学付属病院にてレジデントの方についてカンファレンスを見学したり、回診に同行した。また、アメリカにおける大手薬局チェーン店の CVS ファーマシーを訪問し、その現状についてお話を伺った。全ての講義において興味深い体験をすることができたが、その中でも特に印象に残ったのが「診断のクラス」である。日本では薬剤師が聴診器を携帯したり、患者の身体に触れて診断をするということはあまりされておらず、心音を聞くというのも講義で少し体験する程度であった。聴診器で聞いた音をもとに喘息などの疾患を判断したり、マイクロスコープで耳を診たり、口の中を診たりすることは新鮮な体験であり、教授の「患者の徴候から疾患の判断ができなければ意味がない」という言葉は私に突き刺さった。これは日本に置き換えると、体調不良の原因が見抜けなければ本当にその処方が適切なのか、どの OTC が適切なのか、受診勧奨をしなければいけないのかを判断することはできないということではないかと思う。今後さらに高齢化が進んでいく中で、在宅医療は薬剤師と切っても切り離せない業務となるはずである。この在宅医療を薬剤師の職能として広げていくためには、薬の管理や服薬指導をするだけでなく、診断はできなくとも「判断」のできる薬剤師が必要とされるのではないかと思った。

また、講義に関してもう 1 つ思った点がある。それは学生に与えられる情報量の少なさである。抗菌薬や化学構造式についてなどの講義を受けたが、全体的に教授が学生に与える知識量が名城大学と比べて少ないように感じた。不足する点については学生自ら学ぶのだと思うと、私たちとはモチベーションの違いを痛感した。これは薬局でお話伺ったときに分かったことだが、「Tarascon Pocket Pharmacopocia」という書籍や「Lexicomp」というタブレットのアプリケーションに膨大な量の情報が詰まっていて、これを見れば処方薬や OTC 薬の大部分がカバーできるということであった。そのため、アリゾナ大学では勉強のきっかけが与えられ、その他に必要な情報を各自調べ、オープンディスカッションに臨むという教育体制になったのではないかと思った。この研修中に私たちもオープンディスカッションに加わったことがあったが、まるで続かなかった。これは語学的な問題ではなく、もっと深い部分に原因があると感じざるを得なかった。アメリカは主張する国であり、日本は相手を立てる国である。しかしながら、医療においては患者に最適な医療が施されるよう多職種を伺うことなく各医療人がその職域を十分に発揮するべきである。これはレジデントとともにカンファレンスへ出席したり、回診へ同行した際に医師、薬剤師、看護師、その他職種に関係なく患者のために最良の選択をするために議論している姿を見て強

く思った。

本研修において様々な方からお話を伺う中で、現在の日本の薬剤師の立ち位置は30年前のアメリカとよく似ていると言われた。日本では薬学部が6年制課程になり、その教育制度で臨床教育に力を入れつつある。しかし、アメリカをそのまま真似てしまうと、ただの追従になってしまう。どれだけ医療が進歩したとしても、それによって医療費が上がり、自己破産者の60%の理由が医療費によるものとなってしまえば本末転倒と言わざるを得ない。現在の日本には国民皆保険制度という素晴らしい制度がある。国民全体が医療費のことを心配することなく、適切な医療を受けられることは健康を維持するために絶対的な条件であると思う。アメリカにはアメリカの利点があるが、日本にも日本ならではの利点がある。

この研修期間中にアメリカの薬剤師の立ち位置に憧れを抱いたことは事実だが、あまりにもアメリカの利点に追従するあまり、欠点まで取り入れてしまわないように注意する必要がある。本研修において疑問に感じたことは、アメリカは臨床に力を入れすぎるあまり、研究活動に費やす時間が少ないということである。日本では6年制過程であってもほぼ全員が4年時から研究室に所属し、研究活動を行なっているように、研究にも力を入れている。6年制過程で臨床薬剤師としての職能を確立しつつ、4年生過程の研究コースも大切にしながら、臨床教育も発展していくことができれば今後の日本における医療は良い方向へ進んでいくと思われる。

本研修に参加したことで、日本とアメリカの医療制度や薬剤師の職能、また薬剤師を取り巻く状況の違いを垣間見ることが出来た。この違いを実感することで、インターネットで調べているだけでは分からない雰囲気も感じることはできたのではないかと思う。来年度、自分が薬剤師となる時には薬剤師の職能や周囲の環境は大きく変わっていないと思う。しかし、今後薬剤師も大きなターニングポイントを迎えるはずである。「その時」に備え、常に知識を研鑽し、フィジカルアセスメントなどの技術も身につけ、新しいことに対応できるようにするという意識を持ち続けたいと思う。